

『分離教育における日本の進むべき方向性の検討』

～英国 SEN に学ぶ～



2023 年度

グレートブリテン・ササカワ財団助成金対象事業



一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会

会長 斎藤 利之（代表申請者）

令和5年9月10日

報告書

申請者	一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会 会長：斎藤 利之
プロジェクト名 (日本語)	分離教育における日本の進むべき方向性の検討 ～英国 SEN に学ぶ～
プロジェクト名 (英語)	The future of special education in Japan Should we continue the traditional segregation system? ～Learning from British SEN～
期間	令和5年8月26日(土)～令和5年8月31日(木)
必要機材	ボイスレコーダー 1台 スマートフォン (写真撮影)

[スケジュール]

月/日 (曜日)	時間	内容
8/25 (金)	13:25 15:10 16:00 18:00	ANA4784 谷口氏、JAL ホテル (羽田空港近郊) に前泊 羽田着 移動～ホテルチェックイン 夕食
8/26 (土)	07:00 07:30 09:25 15:50 16:30 18:30	谷口氏 (朝食) 移動～羽田国際空港へ (無料バス) 全員集合 JL043 羽田発 ロンドン着 移動～ホテルチェックイン 夕食
8/27 (日)	08:00 09:00 12:00 13:30 15:00 18:00	朝食 ミーティング (A) ランチ ミーティング (B) Ian Brittain (Prof) ※特別セッション 夕食
8/28 (月)	07:30 09:00 10:30 15:00 18:00	朝食 移動 Stoke Mandeville Hospital ※追加調査 移動 夕食
8/29 (火)	07:30 08:30 10:00 12:30 13:30 17:30	朝食 移動 Department for Education (本調査) ランチ まとめ作業 夕食
8/30 (水)	08:00 09:00 10:00 12:30 14:30 15:00	朝食 ホテルチェックアウト SENSE (本調査: CAMCAP から変更施設) 移動 ホテルへ戻る (荷物ピックアップ) 移動

8/31 (木)	16:00	空港着
	19:20	JL044 ロンドン発
	17:15	羽田着 (解散)
	18:00	谷口氏 ホテルへ移動に後泊
9/1 (金)	11:00	谷口氏、ホテルチェックアウト
	12:00	ランチ
	13:55	JL555 旭川空港
	15:30	解散

【調査1】

調査場所	Royal National Hotel (客室)
面会者	Dr Ian Brittain (Coventry University/Research Professor)
調査時間	15:00~16:30
主な調査内容	<ul style="list-style-type: none">・この仕事に携わるきっかけ・東京 2020 のレガシーについて (←メイン)・その他
調査結果	<p>事前に調査実施概要が提示され、その後同意書にサインをしてからインタビューが開始された。一人約 30 分程度のインタビュー (英語) が行われ、それぞれの立場において、与えられた質問に回答した。主な質問項目は以下の通り。</p> <p>【質問内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・東京 2020 オリパラ後に障害者に対する態度等が、どのように一般人に影響を与えたと思えるか (もしくはなかったか)・今後、日本に海外から障害者が増えることが見込めるか・COVID・19 は、東京 2020 オリパラのレガシーに対してどのような影響があったか (もしくはなかったか) <p>上記の内容を相互質問などで、より深く回答を求められることがあったが、イアン先生からこうあるべきという意見は行わず、あくまでも我々 (被験者) の意見や考えを聞くという形で行われた。</p>
その他	特別セッション

【調査2】

調査場所	Stoke Mandeville Hospital
面会者	特になし
調査時間	12:45~15:00
主な調査内容	<ul style="list-style-type: none">・病院の歴史・周辺環境の確認等
調査結果	<p>ストークマンデビルスタジアムは、イングランドの国立障害者スポーツセンターである。バキングラムシャーのアリスベリーにあるストークマンデビル病院の隣。同施設は、車いすスポーツ団体の全国組織である「Wheel Power」によって運営されている。尚、2001年に約 1,000 万英鎊をかけて改修され、現在の名称となっている。また同施設には、トレーニングセンターやプールだけでなく、パラリンピック関連の展示物や説明パネルがいくつかあり、その歴史を知ることが出来る。</p> <p>一方、ストークマンデビル病院は、国立保健サービス (NHS) によって</p>

	<p>管理されている公共病院。この地で 1948 年 7 月 28 日（ロンドンオリンピック開会式と同日）に行われた「ストックマンデビル競技会」（障害者による最初の国際的な競技大会）は、パラリンピックのルーツとなった。この病院では脊椎損傷のリハビリとしてスポーツを早くから導入していた。</p> <p>尚、病院の入り口（道路）には、パラリンピックにおける 4 つの重要な言葉（シンボル）の石碑がスリーアギトスと共に建てられている。</p>
その他	追加調査

【調査 3】

調査場所	Department for Education
面会者	<ul style="list-style-type: none"> ・ Andre' IMCH (イングランドにおける SEN と障害に関する専任アドバイザー) ・ Penny Barratt (イングランドにある 5 つの学校 (内、4 つは SEN) に対してアドバイスする立場)
調査時間	10:00~12:00
主な調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英国における SEN^{*1} の制度 (資料あり) ・ インクルーシブ教育に関する考え ・ 日本の立場に関する助言等
調査結果	<p>これまでの SEN の歴史および現在課題とされる事案に対して、包括的に説明を頂いた。基本的に英国では、1970 年に制定された「The Education Act」法律をもとに、Warnock Report(1978)などいくつかの改変を経て、現在の SEN に関わる法律が作られている。</p> <p>そして現在、英国も日本同様に、ADHD や LD および自閉症などの発達障害系の児童生徒数が年々増加しており、Main Stream School (通常学校)における様々な対応等、インクルーシブ教育を「標ぼう」してきた、これまでのシステムの足元が揺らいでいるという。</p> <p>我々は、当初、英国におけるインクルーシブ教育が親や本人および社会のニーズとして十分な役割を果たしてきていると考えていたが、現在では、その限りではないことが発生している。特に障がいを持つ親の中には、SEN への入学を希望しているケースが散見され、仮に親が SEN を希望しても、様々な条件や法律の下、そのハードルは高く、逆に SEN に入れない状況があるという。そこで、政府は、それらを是正する目的で、Children and Families Act(2014)や Code of Practice(2015)など、必要な法律を整備し、ある意味、現在の日本の教育環境 (通常学校と特別支援学校への入学を当事者が選択できる) に近づいているとも解釈できる。</p>

	最後に、今回の英国教育省でのヒヤリングから、今般（2022年9月）、国連が日本政府に対して、「分離教育の廃止」を勧告したが、改めてその妥当性に関して、国内で再検討することが肝要であると我々は結論付けた。 ※1) SEN (Special Education Needs の略) は主に学習障害の児童生徒を対象としている。
その他	本調査

【調査4】

調査場所	SENSE
面会者	<ul style="list-style-type: none"> ・ Tracey Robson (SENSE Barnet Hertfordshire 施設 デイケアサービス事業担当) ・ Katy Sawyer (SENSE Barnet Hertfordshire 施設 スポーツアクティビティ事業担当)
調査時間	10:30～12:00
主な調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同施設における運営方針 ・ インクルーシブ活動について等
調査結果	<p>SENSE では、複雑（重度、重複）な障害をもつ人々に多様なサービスを提供し、特にスポーツを取り入れた活動において成果を上げている。具体的には、SENSE のスポーツ活動が、スポーツイングランドから認められ、過去においては、単発的な助成金のみであったが、現在では、パートナーとして協働で活動するまでになっている。スポーツ専属スタッフも、立ち上げ当初はわずか2名であったが、今では22名にまで増え、スポーツ以外のスタッフも入れると50名近くになる。利用者は平均40名/日であり、外部指導（施設外の利用者への支援、アウトリーチ）も行っている。</p> <p>また、直近4年間における助成金の総額は£150万（約2億7千万円）であり、イングランド（我々が訪問した先）以外の他の地域のSENSE に分配する等して、英国全体で、同様のサービスが受けられるようにしている。</p> <p>但し、利用者の1日の利用料は決して安くはない。1日（9時～15時30分まで）の利用で、£200（約37,000円）となる。しかし、この金額には利用者および保護者は満足しているという。この利用料の支払いは、障害年金で一部あるいは大部分を賄うことが可能であり、実質的な負担額は、かなり抑えることが出来るという（障害年金額は個人差あり）。</p> <p>最後に、同施設における「インクルーシブスポーツ」の意義としては、健常者とのインクルーシブ活動というより、障害者同士が同じ活動場所で同じ時間を共有するという、「相互刺激」や「共同者感覚の醸成」により活動の効果が高めることを意図していることが分かった。</p>
その他	CAMCAP から変更施設⇒8月17日（連絡済） 本調査

【総括】

今回の調査は、日本に対して、国連より 2022 年 9 月に発せられたいわゆる“分離教育の是正勧告”に関し、日本政府（文部科学省）は否定的な立場をとっており、それに対して、国連のみならず、特に障害当事者および関係する団体から厳しい目が向けられ、双方の隔たりが埋まっていない状況を鑑み、我々のチームが独自の調査を行い、その実態を明らかにすることを目的とした。

具体的には、先ず、日本国内 4 か所（沖縄、名古屋、旭川、福岡）においてタウンミーティングを実施し、「当事者・特別支援学校教諭（元も含む）・保護者・有識者」等から、同問題における現状や課題に関して率直な意見交換を行った。その結果、分離教育を積極的に否定する事例がどの地域からも認められず、むしろ現在の特別支援学校を中心とした具体個別の支援プログラムは、一定の理解と支持を得ていることが明らかとなった。

次に本調査の中心（助成金事業）である、英国において、この問題に対して、どのように考え、また、どのような課題があるかを日本との比較等も含め調査し、以下の知見を得ることができた。

英国では 1970 年に制定された法律の下、今日に至るまで国を挙げて“インクルーシブ教育”の重要性に注視してきたが、近年、保護者や当事者のニーズは、SEN（特別支援学校）への入学を希望し、メインストリームスクール（通常学校）での統合教育では、その対応に十分な支援と必要な時間や人を確保することが困難になっているという。ヒヤリングを進めて行く内に、英国では、日本の特別支援学校に相当する教育システムが結果的に当事者の利益につながっており、このことは、現在の日本のシステムに新たな判断もしくは選択を迫られているものとして痛感させられた。

このように我々のチームは、実際に関係する方々から直接話を聞くことを通じて、言葉の裏にある“想い”や“苛立ち”などを慎重に扱い、常に公平な立場で調査を行うことを心がけた。その中で、特に、英国の“今”を知り得、今後あるべき方向性の道標となる情報を具体的に入手できたことは非常に大きな価値であると考えます。

そこで、今回の調査から得た情報をもとに、障害者全般に関する教育システムの在り方について、様々な角度から必要に応じて検討頂くための基礎的資料を日本政府（文部科学省）に報告したいと思う。特に 2024 年 4 月からは、障害者差別解消法が改正され、事業者による障害のある人への「合理的配慮」の提供が義務化されるなど、障害者を取り巻く環境は大きな転換期を迎えている。よって今回の調査は、新しい社会環境をつくる責任において、その在り方に一石を投じる調査であったと考える。

最後に、このような特別な機会と過分なご支援を頂いた「グレイトブリテン・ササカワ財団」様に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。また、国内外で本調査にご協力いただいた全ての皆様にも感謝の意を表する。

〔活動の様子（写真）〕

	
<p>Ian 先生</p>	<p>ストーンマンデビル博物館</p>
	
<p>ストーンマンデビル病院</p>	<p>英国教育省入口</p>
	
<p>英国教育省（集合写真）</p>	<p>英国教育省（会議風景）</p>
	
<p>SENSE（活動現場）</p>	<p>SENSE（会議風景）</p>



英国風景 1



英国風景 2